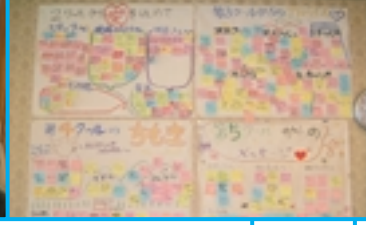
山古志村ボランティア活動記

昨年10月末に起きた新潟県中越地震で大きな打撃を受けた旧山古志村（現長岡市）。全棟避難勧告により村民は故郷に足を踏み入れることすら叶わない日が続きましたが、ようやく入村が可能になりました。しかし、全壊した家屋、道路などの復旧にはなお、長時間を要するといわれています。

震災後、村の復興に尽力する旧山古志村村長の長島忠美氏（前長岡市復興管理監、現衆議院議員）が本学の卒業生（昭和47年度経済学部卒）という縁もあり、東洋大学は募金活動や教育研究などさまざまな側面から復興支援を行ってきました。そしてこの夏、いよいよ入村可能になった旧山古志村へ、学生ボランティアの有志174名が話ました。初めての体験に驚きや戸惑いもあったはず。そんな彼らから報告が届きまし



被害の凄まじさを前に

ボランティア感想●被災者の方は苦しみ、悲しみの感情を表に出さない●今、自分が何も気にせずに生活し、生きていることがどんなに幸せなことかがわかった●実際に現場を見るのと、テレビで見るのとは違った恐怖を感じた●一階建ての家屋がすべてつかる水や、一階部分が土砂で埋まっているのを見ると、復興には大変な労力と時間が必要だと感じた●現場を目の当たりにすると、何が言葉に出来ないような感じになった●言い方は悪いが戦争の後みたいな姿であった。自信をなくしたが今僕たちにできる事をするのが大事。何年かかるかわからないが元に戻った時に、僕らも少し手伝うんだ、役に立つんだと感じた●被災者の人達はどこにこのツラさ、苦しみ、怒り（?）をぶつけるのかと思った。1人で解決するのは大変だと感じた。少しでも、山古志村の為に働きたい

山古志の自然と人々の温かさに触れて ―悲しみを乗り越えた強さ、逞しさ

ボランティア感想●牛が死んでしまい、埋めた事など、内容がかなりシリアスなのに平然と、笑顔で話している事に驚き、感動を覚えた●山古志の自然の雄大さに驚き、これからもこの自然を壊すことなく残したいと思った●闘牛場という山古志の文化に触れ、その復活のための手助けができたという達成感があった●実際に現地を歩いた。地震発生当時、本当に悲惨なものだったということを感じた。一年ほどたった今もこんな状況なのに、それでも出会った人達は元気で明るかった●作業の終盤にいらない家財を焼却したが、自分の家財に火をつけて、それを見つめていたおじいさんの姿に、震災の傷というものを感じた。最後に「ここのことは一生忘れんけんの」と言われて、胸がいっぱいになった●お店の大きい冷蔵庫のドアが大きく歪んでいたのを見て、地震規模の大きさを改めて実感●旧村役場は悲惨だった。カベや床はボロボロ、粉じんや暑さで解体整理はとても大変だった。しかしその分やりがいはあった

現場でのとまどい、そしてチーム間での成長―なにをすればよいのか？ボランティアとは？

ボランティア感想●最初のミーティングで、ある人は、あまりでしゃばらずに、ある人は、積極的に、とのことだったが、両方のバランスが大事だと思うので、被災者の気持ちをうかがうことが必要か●コミュニケーションをとることが、予想以上に難しかった●ボランティアスタッフの話を聞いて、彼らの思慮深さには頭が下がる。僕も帰る頃には少しでも彼らに近づきたい●統括リーダーがミーティングにおいて、災害復興のボランティアは、楽しく行うことがより大事と助言された。この点が、賃労働としての廃棄作業とボランティアとの違いなのではないか●3泊4日という期間、初日は不安感、2日目は悪戦苦闘、3日目は思案思案、4日目は充実感＋寂しさ、短いようだけどその分濃い1ヲノにすることができ、ちょうどよい期間だった。自分の中で、明らかに来る前よりがすがしい充実感が湧いて、本当にボランティアに参加して良かった●4日間も一緒に活動をした仲間は違う。班の垣根もなく協力しあい、みんな助け合っていたことがすごく良かった

作業の中で

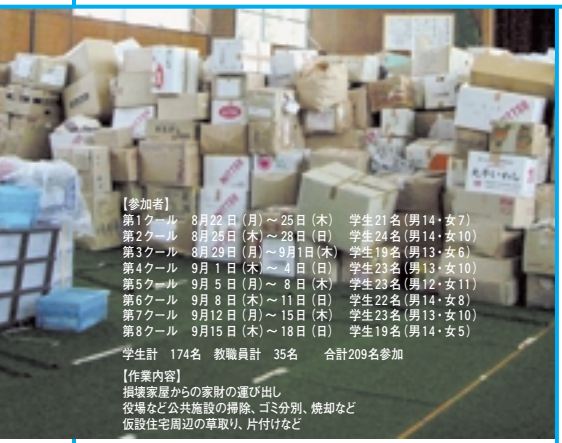
ボランティア感想●今日の作業の実感はとても大きかった。しかし、充実感を得るために作業したのではなく、そこから何を学ぶか、だ●村の人とふれあい、南京縛りなど日常の生活に役に立ちそうな知識も教わりとても良い経験になった●「何から手をつけていいかわからない」というまさにそのような現場だった。被災者にとって、片づけを始める最初の一歩が大変だということが実感できた●グループ間で「うしろ通るよ～」などの声かけが次第に多くなった。自分が見つけた作業を責任をもって成し遂げていた。被災者の方ともよく話し、一緒に作業しようとする努力が見られた●住民の方とのコミュニケーションがうまくとれなかったが、途中から会話が弾むように。一緒に作業しているときに、積極的に質問したからだと思う●同じ大学生を相手にまとめるのは非常に難しかった（自分より年上の人がいたり、様々な人がいるので）●気をつけなければいけないのは「住人の方のベースでやる」ということ。私たちは手伝いに「心でサカサカ早いペースで片付けようとしがち。家の人は自分の宝物のようなものを識別したいのに、せかしてしまったかもしれない●気を遣っていただいたことを、逆に申し訳ない気分になった●食料調達の買い出しに車で片道20～30分かけて行った。みんなが作業から帰ってくると現場での大変さが顔の表情で伝わってきた

学び、感じた思い ―ボランティアから得たもの

ボランティア感想●僕の実家は山古志ほどではないが、同じような雰囲気を持つ場所なので、重ね合わせてしまっていることがあった●もっと聞きに手になってあげなければいけないと感じた。特に老夫婦は日頃、会話する機会が少ないのか、私達が行った際、とても話しかけてきてくれた。なまりなどがあり難しいが、とにかく聞き上手になってあげる事が必要●何度もありがとうや「ごめんなさいね」などと言われた。相手にとって、結構貴重な戦力になるのかもしれない●作業中は、どうしても黙りがちになってしまう。声かけ等のコミュニケーションがとれた方が作業が進む、場の雰囲気も良くなる●この4日間の経験は、今後社会福祉を学んでいく上で絶対に活かせると思った。大変だったが楽しい4日間でした●住民と僕たちの作業の仕方の考え方が違い、やり直しの作業が出てしまい困った。あくまでも住宅はその住民のもので思い入れが強い、ショックも強く受けているので相手のペースに合わせるのが必要なのでは●知らない人でも気持ちが一緒だとすぐに仲良くなれる!!●テキパキ動けるよう、先を見て行動したい、あいさつ、行動、情報収集。この3つが特に大切だ●誰かがやらないと復興が進まないことに気づいた。災害を乗り越えるために働く様々な人がいると知った●現場を見て言葉が出なかった。そこで何ができるか自分なりに考える事が必要だ。オレは何ができる!?●どうにかしてこちらの感謝の気持ちを伝えたい●ボランティアは初めてだったのでかなり気構えていた部分があったけれど、ボランティアセンターの方々の話を聞いて、ボランティアとはべらぼうに引っ張っていくのではなく、後ろから肩を押す感じで、きっかけ作りなんだということを強く学んだ●普段恵まれた環境の中で享楽主義的な消費生活を送っていた自分を少し省みるチャンスになった。このボランティアは山古志のみなさんのためであると同時に自分のためであったように思う。この4日間に見た景色、聞いた声、話した言葉の数々をいつまでも忘れずにいたい●田舎の暮らしは体験してみないと理解できない●単発で終わらず、継続して気持ちを持つことの大切さを実感●驚いたことは山古志村の人がとても明るく元気だったこと。僕たちが元気をあげに来たのに、逆に元気を貰った気がする。ホッとしたしうれしかった●少しでも復興の役に立てることがあれば今後も積極的に参加したい●避難所で産まれたという赤ちゃんを見た。あの子はまた自分の家で暮らしたことがないんだなあと思った。あの子が早く自分の家に帰れる日がくるといいなと思った●本当に人の役に立てたのかが気になった●貝殻運びは本当にささいな活動だと思ったが、このちょっとしたことの積み重ねがボランティアにおいて大切なことだ●活動をすることで、次第に現地の方に認知されれば、協力を要請する方も増えると思う

今後の課題

ボランティア感想●子どもとのふれあいも大切。年齢的に近い私達が、他のボランティア団体からは優先順位の低いかもしれない子どものことを考え、一緒に遊んだり、遊び場の少ない子ども達の環境を少しでも良くしてあげたい●3日目になって、自分で考えて自分で動けるようになった。今までは指示されたことをやるので精一杯だった●支援物資や支援の方法など実際の経験をふまえて考えていきたい●第2クールから学生スタッフを設ける事になったが、ボランティア本部と現場スタッフをうまく繋ぐ事ができるか心配だった。本部と現場を分けると、現場での意見をうまく聞くにはコミュニケーションを上手にとらなければならないし、本部のスタッフは山古志の人と触れ合う機会や現地を見てまわる機会を失ってしまうので、本部の学生スタッフは慣重に選ぶ必要がある●山古志の人に感謝の気持ちでいっぱいだ●作業を終えて、物やお金の面だけでは支援しきれない所があると気づいた●経験不足による会話の難しさ。自分たちの得た情報を次に来る人たちに伝えなければならない。仮設住宅で暮らしている人々の楽しみを作るということについて各班からたくさんの意見が出された●終了ミーティングの時に、相手が見えにくい作業でも、活動の先には必ず何か意味があるんだという言葉が印象に残った。これからボランティアをしていく上でとても大切なことだ●他人のためになることを実行するのは難しい●今日は自分達にできる仕事が少なく、何もできないでいることに、とてももどかしさを感じた。「ボランティアは口で軽々しく言うほど簡単ではないと思い知らされた●道路を作るためにも木々を伐採し、二重の自然破壊を行っている。それによりさらに自然災害が起こりやすくなる状況を作り出してしまっている●活動していくうちに芽生えたのが「このお宅をきれいにしてあげたい」という気持ち。みんなも同じ気持ちだったと思う。その気持ちがあったから作業も普通以上に進めることができた●手すきの時間ができた時に、どのような行動をとればよいのかの判断が難しい●「本当」に役に立てたかわからない。心のケアまで充分できなかったかもしれない



【参加者】

第1クール	8月22日（月）～25日（木）	学生21名（男14・女7）
第2クール	8月25日（木）～28日（日）	学生24名（男14・女10）
第3クール	8月29日（月）～9月1日（木）	学生19名（男13・女6）
第4クール	9月 1 日（木）～ 4 日（日）	学生23名（男13・女10）
第5クール	9月 5 日（月）～ 8 日（木）	学生23名（男12・女11）
第6クール	9月 8 日（木）～11日（日）	学生22名（男14・女8）
第7クール	9月12日（月）～15日（木）	学生23名（男13・女10）
第8クール	9月15日（木）～18日（日）	学生19名（男14・女5）

学生計　174名　教職員計　35名　　合計209名参加

【作業内容】
損壊家屋からの家財の運び出し
役場など公共施設の掃除、ゴミ分別、焼却など
仮設住宅周辺の草取り、片付けなど

白山キャンバス6号館連絡通路には、日本の故郷の原風景ともいえる美しい山古志村の写真が展示されています。撮影は、山古志をテーマに数多くの作品を発表し、ご活躍されている新潟県出身の写真家・中條均紀氏。ぜひご覧ください。

なお、今回の学生ボランティアによる報告会が一般学生、教職員などを対象に10月22日（土）白山キャンパスにて行われます（内容は次号200号に掲載）。ボランティア募集の告知は一週間と大変短い期間でしたが、募集人数を大幅に越える申し込みがあったことをご報告します。皆さんの思いが一日も早い復興につながるよう、今後も全学的な支援を続けていきます。